

(そのとき、イエスは弟子たちに)たとえを話された。「盲人が盲人の道案内をすることができようか。二人とも穴に落ち込みはしないか。弟子は師にまさるものではない。しかし、だれでも、十分に修行を積み、その師のようになれる。あなたは、兄弟の目にあるおが屑は見えるのに、なぜ自分の目の中の丸太に気づかないのか。自分の目にある丸太を見ないで、兄弟に向かって、『さあ、あなたの目にあるおが屑を取らせてください』と、どうして言えるだろうか。偽善者よ、まず自分の目から丸太を取り除け。そうすれば、はっきり見えるようになって、兄弟の目にあるおが屑を取り除くことができる。」「悪い実を結ぶ良い木はなく、また、良い実を結ぶ悪い木はない。木は、それぞれ、その結ぶ実によって分かる。茨からいちじくは採れないし、野ばらからぶどうは集められない。善い人は良いものを入れた心の倉から良いものを出し、悪い人は悪いものを入れた倉から悪いものを出す。人の口は、心からあふれ出ることを語るのである。」 -ルカ6章-

非対立の戒め

「ひとを裁く人」を、主は 『偽善者』 と呼んで戒められます。

“人を裁くな、、頬を打たれたらもう一方の頬をも向けよ” これら一連の主の戒めは、たとえあなたが被害者にされても、心は主を避難所にして、怒らず、愛を持って接し、決して加害者にならないという 『非対立』 の戒めです。

いかなる場合にも、『怒り』は争いを起こし、分裂を生む原因となりますから、信仰者は加害者に対しては、自分の思い(自我)ではなく、聖霊を向かわせて裁きを神に委ねるのです。人は神を前にすると、自分は今まで、いかに神から離れて生きていたかを瞬時に悟る鏡の前に立たされ、自分の醜さを見せられると言います。聖霊は加害者に自制を促し、被害者は、聖霊と共に加害者の回心を忍耐を持って待つのです。すべて、回心は聖霊のわざなのですから 『裁き』 は神にお任せするのです。

臨死体験を通して神に出会ったと言われる高木善之氏は、このことを悟らされた方でした。彼は、光である神を体験し、そのみ心が平和そのものであることを見せられて後、平和の使命を受けて『非対立』を唱える人となったのです。

その生き方は、

<くしないこと> 戦わない、競争しない、抗議しない、要求しない、決めつけない、主義主張しない。

<くすること> 事実は勇気をもって伝える。

<そのうえに> よく聞いて、共に考え、気づくまで待つ。

- ◎ 相手との無駄な対立を極力避ける
- ◎ 自分にとって不快なことであっても、向こうにもそれなりの考え方や事情があるのだと一歩下がって対応する
- ◎ 対立状況があって、少しも好転しない時、正しい知恵があると思っ



『地球村』代表高木善之氏
Twitter 画面より

“ 心は主を避難所にして、怒らず、愛を持って接し、決して加害者にならない ”

主の戒めそのものです。このような氏ですが、私に「キリスト者は嫌いだ。偽善者が多い」と言われたのには、今日の福音の主の言葉と共に心に刺さりました。